

杉浦明平

失蹤記

杉浦明平

失踪記



講談社

失蹤記^{しつそうき}

昭和五十五年七月二十五日 第一刷発行

著者——杉浦明平

© Minpei Sugiyura 1980, Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—〇四—二三（大代表） 振替東京八一三〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——二二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

文壇太平記

5

失踪記

53

激動の季節

149

後書き

203

装幀
田村義也

失蹤記

文壇太平記

一

文化も末ごろの十二年、江戸文壇において最大のトピックになったのは、千住の酒合戦と文人番附騒動に加うるに松屋・泊きざなみのや泊舎の和解一件だった。文壇といっても、漢詩人、漢学者（以上は大てい一人二役だったが）、大和絵師、南画家、書家、篆刻家、歌人、連歌師、狂詩作者、狂歌師、俳諧師匠などから成っていて、ときには医者も加わるけれど、戯作者、浮世絵師、川柳師匠は省かれていた。身分が一段と低いことになっていたからである。もともと山東京伝は、狂歌師であり、考証学者として、滝沢馬琴はやはり考証家として、文壇に席を占めることを許されていた。といっても狷介な馬琴は、後には文壇を白眼視して、文人どもとほとんど交際しなくなるが、このころも『南総里見八犬伝』初輯を上梓、人気上昇ちゅうの売れっこで、のんきな文壇づきあいどころではなかった。

そもそも酒合戦は、千住駅煮売酒屋中六亭主人中屋六左衛門が還暦記念に催されたものである。予め都下及び近郊にきこえた酒豪——笑い上戸、眠り上戸、泣き上戸、理窟上戸（怒り上戸は除いた）——に招待状を發して、吉日と卜された文化十二乙亥年霜月二十一日に中六亭別荘海竜亭で開かれた。この海竜亭の門には、

「不許惡客入庵門」

という聯がかかっていた。惡客とは下戸で理窟ばかりいう人を意味する。

玄關には袴をはいた男五人が座っていて、順次到着する來客にそれぞれの酒量をたずねて、それに応じた切手をわたし、一旦休憩所に待たせて、一応の人数が揃ったところで、左右二隊に分けて酒戦会場に案内した。相会する者凡そ一百余人というから、ずいぶん広い座敷であつた。

会場の真中には白木の台に大盃がのせてある。そのさかずきは、いずれも蒔絵朱塗りの、

江島盃五合入

鎌倉盃七合入

宮島盃一升入

万寿無疆盃一升五合入

緑毛龜盃二升五合入

丹頂鶴盃三升入

の六種類。

肴として、一つの台はからすみ、花塩、さざれ梅、干あわび等の盛合せ。別の台には蟹と鶉の焼鳥が盛られ、中でも人目をひいたのは綾瀬川で今朝とれたばかりの鯉数尾が庖丁さばきもあざやかな刺身として盛られた大皿だった。酒は伊丹の銘酒玉緑という。

会場の左側には賓客席が設けられて、緋毛氈をしき、合戦場とは青竹で境をされていた。もちろん賓客席にも、酒肴ともたっぷり行きわたり、煙草盆も並べられている。招待されたのは、文壇の大御所大田南畝先生、亀田鵬斎先生、画壇の谷文晁、酒井抱一の両大家。文晁先生は息子の文一や門人の渡辺華山（このころは華山ではなく華山だった）を連れてきて、文一に会場の模様を写生させた。文一描く酒合戦図は印刷されたというけれど、わたしは属目する機会に恵まれていない。が、文晁のお供で出席した華山の「千住酒合戦屏風」二双一曲はカラー写真によって見ることができた。その写真によれば、明らかに抱一上人と目される上品な僧侶や南畝・文晁らしき名士の顔も見え、鶉の焼鳥をのせた白木の台や乾物の盛合せも見えている。

さて、試合の運びは、まず左右に分かれた五十数組から順次一人ずつ前に出て相對して席に就く。今日のため招かれてきた柳橋の美妓四人のうち（一人は賓客席で賓客の接待に忙しい）二人が對決する選手の側に侍っている。もう一人の女が、玄關で渡された切符に応じた盃を捧げて進み出で二人の決闘者の前におくと、二人はその盃をうやうやしく捧げ持っている。と側に侍る二人の芸妓がそれぞれ特製の片口をとって、その盃にトクトクと酒を注ぎこむ。酒はもちろん冷である。

床の間に近い上座に袴姿ですわっている記録係が、飲みほすたびに、すばやく帳面に記入する。それだけでなく、会場を出てからの行動まで追跡調査がおこなわれた。

この会場で実力の程を示したのは、野州小山宿からはるばる出場した佐兵衛という男で、二升五合入りの緑毛亀盃を三回傾けた。七升五合である。掃部宿に住む百姓市兵衛は一升五合入りの万寿無疆盃を三つ重ねた。四升五合。しかし大長と江戸で鳴らした酒飲みは四升以上を平らげて、近くの蒲団部屋に酔いつぶれていたが、翌朝七時ごろ起き上るや、またひとり会場にもどって一升五合を傾ぶけて「ああ酔醒めの水はうまい」と世話役に一礼して家に帰っていった。

変わっていたのは大門の長次と吉原で知られた飲み助で、試合の席に出ると、

「おい、腹の中で三杯漬をこしらえるから三味線で景氣をつけてくれ」

と、酒一升、酔一升、醬油一升、水一升を、三味線の伴奏にあわせて飲みほしたのに、会場は拍手喝采。

柳橋芸妓の中でもお文は一日じゅうお酌につとめ、三味線をひくかたわら、江島（五合）鎌倉（七合）の盃で酒をのんでいたし、女の酒豪として有名な天満屋のみよは万寿盃（一升五合）を飲み尽くしながら、会場のお手伝いをしていたが、ぜんぜん酔った色が出なかった。ただし菊屋のおすみは酔いつぶれたので、緑毛亀盃（二升五合）を飲みおったぜという評判だったが、記録を調べたら、鎌倉盃（七合）にすぎなかった。

一方、賓客席の方でも酒に目のない文晁、鵬斎の二先生は、江島（五合）鎌倉（七合）をかた

むけただけでなく、たえずあちらこちらから廻ってくるおちよ、こをことごとく受けて返していたから、さすがにつぶれそうだった。

そこで今日の主催者中六亭が酔っぱらった文晁先生たちを辻駕籠で送ろうとしたけれど、あいにく千住駅の駕籠かきたちは中六亭から贈られた樽の鏡を抜き、瓢箪で好きなだけ汲み出しては飲んだあげく、全員酔払って寝こんでしまい、駕籠をかつぐ駕籠かきが一人もいなかった。やむなく、大先生がたもふらふら危っかしい足どりで夜道を引揚げる以外にはなかった。

いや、今日の台所を預った賄い主任太助は、朝から料理をつくりながら、丹頂鶴盃（三升）になみなみとたたえられた酒をちびちびやっていたら夕方にはすっかり空っぽになっていた。

二

宴さかりをすぎて盃盤狼藉をきわめたころおい、見知らぬ男二人が受付係に案内されて入ってくる。「どなたか」とたずねると、

「それがし会津の河田と申すもの。商用にて江戸に滞在中ですが、闘飲の会が千住にて催されるとやかましい声を耳にさしはさみ、それがしも国元にあっては相当に名を知られたもの。ご招待をいただいておりますが、ぜひお江戸の衆と一ちよう勝負仕りたき熱い願いをもって、宿の亭主といっしょに押しかけてまいってござる。ご無礼ひらにご容赦下され」

「わたくしはお供だけでして」と連れの男は恐縮してつけ加える。

「それはそれは、よくぞおいでなされた。さあさあこちらへ」

とさつそく試合席に上つてもらう。

「それでは一番小さい盃を」

と押入り客は五合入の江島盃を所望した。もはや五十数組の勝負は完了して相手はないから、独り相撲というわけだが、いかにも会津の山猿というように毛深い両手で、芸妓の捧げる盃を受けとり、もう一人の芸妓にお酌をしてもらうと、息もつがずに、五合を飲みほして、唇を嘗めまわしながら、

「甘露、甘露。会津ではこのようにうまい酒にありついたことがござらん」と。

次いで鎌倉盃、宮島盃、万寿盃を軽く飲みほして、そのたびに上下の唇を舌なめずりしては、「まことに甘露でござる」と歎賞する。二升五合なみなみと注がれた緑毛亀盃もゴックリゴックリ咽喉を鳴らしながら吸いこんでしまった。

「では、丹頂鶴盃で頂戴いたそう」

そのまわりにいた人々は肝をつぶして、

「いや、酒が惜しいわけではござりませんが、これ以上飲まれては体にもさわりましようから」と押しとどめる。

「そうですか。やむをえぬ用事があって明朝よそへ出かけねばなりませんから、今回はあきらめましょう。ああ明日の用事さえなかったら、今一献平らげようものを。いや、ご馳走さまでし

た」

と一礼して、宿の亭主とともに引揚げていった。全然足がみだれていない後姿を見送ってから会場にもどった受付係が、

「今の会津の客が今日の酒合戦の大関ですか」

といえば、記録係も酒豪をもつてきこえた賓客の鵬齋先生・文晁先生・南畝先生ともに舌を巻いて、

「当人の希望どおり丹頂の盃まで飲んだら、文句なしに、東の大関じゃ。大関候補の米屋松勘は今日は風邪気味で調子が出ぬと万寿盃で打切り、大長のやつ四升で酔いつぶれてしまった。百姓市兵衛は飲みっぷりがわるくて大関には推薦しがたい。今日の勝負はお預けといたそう」

と決定した。というのは、喧嘩口論はなかったというものの、当日の参加者百余名のうち、酔いつぶれなかったのはたったの三人。会場でぶっ倒れなくても隣りの室でのびたり、近くの知人の家や観音のお堂に寝こんだりした。飲みっぷりだけでなく、事後のエチケットまで採点したら、大関の資格にかなう飲み手は見当たらなかったからである。

上にもふれたようにこの酒合戦の様子は文晁の子谷文一と文晁門人渡辺華山によって写生された。華山は数え年二十三で、蘭方医吉田長叔先生や桂川甫賢のところへしきりに通ってオランダ熱を高めているさいちゅうだった。華山の屏風は今も残っているが、その左肩に鵬齋の詩と蜀山人の狂歌が書かれている。がわたしのもらったカラー写真はいたく縮小されていて、その文字を

読みとることがむずかしい。虫眼鏡をもって何とか読もうと再三再四試みたけれど、ついに南畝の狂歌の下三句「としの名を本卦かへりの酒をこそめ」しか読むことができなかった。

文一の写した方は絵巻物「高陽鬪飲図巻」として中六亭主人に贈られたようである。その絵巻物には、鵬斎先生が「高陽鬪飲序」を書き、大窪詩仏が「題酒戦図」を書いている。

そして文壇の大長老大田南畝が『後水鳥記』を執筆したことも忘れてはなるまい。考証学者の南畝によると、慶長二年大師河原池上太郎左衛門底深の家へ、大塚の地黄坊樽次なるものが酒飲み仲間を引き具して押寄せ、酒合戦をしたことが『水鳥記』に載っている。そこで開幕以来二度目の酒合戦の記録を『後水鳥記』と題したのである。

この日、ついに番附をつくることができなかったので、番附編成は来年（文化十三年）八月柳橋の高級料亭万八楼で再度の勝負の結果を見できめることになった。が、どういう理由でか、たぶん主催者を買って出るものがなかったため、翌年八月には酒合戦はついに開催されなかった。

そのかわり瓦版によれば、翌々年の文化十四年三月、万八楼で大酒大会がひらかれた。今度は酒組と菓子組と飯組の三組にわかれて勝負した。酒の部では小田原町堺屋忠兵衛（六十八歳）九升、芝口鯉屋利兵衛（三十八歳）一斗九升五合。菓子の部、神田の勘右衛門（五十三歳）饅頭五十、羊羹七棹、薄皮餅三十、茶十九杯。八丁堀いすや清兵衛（年不詳）饅頭三十、鶯餅八十、松風三十枚、沢庵五本。飯の部、浅草和泉屋吉兵衛（七十三歳）飯五十杯、唐辛子五把。三河屋三左衛門（六十歳）飯五十杯、醬油三合。そういう大記録が樹立されたと刷りものが江戸の好事